

## 百人浜における漂着海鳥の報告と傾向

Report and trend of collected sea birds in Hyakuninhama, Hokkaido

増渕 隆仁<sup>1)</sup>

Takato Masubuchi

## 摘要

近年、海岸の砂浜に打ち上げられた漂着物を収集するビーチコーミングが日本全土で定着・普及している。北海道の太平洋側に位置する百人浜（幌泉郡えりも町）は、東西に約10kmに渡って広がる海岸であり、海岸の沖合では黒潮と親潮がぶつかり、多種多様な漂着物が集まることで知られている。そこで本研究では、漂着・収集した海鳥について報告する。本調査で集めた収集物は2011年に73羽、2012年に49羽、2013年に42羽の計163羽の海鳥を収集した。本調査における多くの収集物は、7月に収集された。また、渡り等の長距離移動する個体の漂着は、7月から9月にかけて減少傾向にあった。主な漂着理由として、沖合の漁業や投棄漁具による混獲が原因だと考えられた。また、収集状態の良い個体については、悪天候による衰弱死も主な漂着原因のひとつだと考えられた。

## Abstract

Recent years, collecting driftage in the coast (the beachcombing) have considerable currency in Japan. In the Hyakuninhama, Hokkaido, Japan was known for aggregating a multiple of drift object because of complex current around this site. In this study, we reported that gathered sea bird in the Hyakuninhama. We have collected 163 sea birds in three years (73 sea birds (2011), 49 sea birds (2012), 42 sea birds (2013)). Sea birds have gathered in July than August and September. In addition, birds of passage were decreased from July toward September. It is suggested main reasons for being washed ashore was bycatch in the fishery and debilitation from bad weather in July.

キーワード: 百人浜、漂着、海鳥、混獲

## はじめに

近年、海岸の砂浜に打ち上げられた漂着物を収集するビーチコーミングが日本全土で定着・普及している。収集物は、収集者によって多種多様であり、海外の空き瓶から流木、貝殻、動物の死骸まで幅広く収集されている。また収集された漂着物は、現在の海洋環境の指標となり、海洋環境の学習の場としても利用・注目されている。

北海道の太平洋側に位置する百人浜（幌泉郡えりも町）は、東西に約10kmに渡って広がる海岸であり、海岸の沖合では黒潮と親潮がぶつかり、多種多様な漂着物が集まることで知られている。特に、夏季（7月～9月）は、台風等の影響を受け漂着する海鳥が多く、収集する機会が多くある。しかし、漂着する海鳥の特徴などの報告は少なく明らかになっていない。

そこで本研究では、2011年から2013年の夏季に収

集した漂着海鳥の特徴を報告する。

## 材料・方法

### (1) 収集場所

収集場所は、北海道南端に位置する幌泉郡えりも町百人浜とした。百人浜の全長は、東西に約 10km、幅 200m に渡って広がっている。

### (2) 収集期間・記録内容

収集期間は、2011 年から 2013 年の 7 月から 9 月の期間に少なくとも 1 週に 2 回の収集を行った。また、収集物は、収集した際に、収集日時、収集場所、種、収集状態・収集状況を記録した。なお収集状態は、腐敗や白骨化の程度によって区分し、A(ほぼ損傷・欠損なし)、B(軽度の損傷・欠損はあるが種判別可能)、C(大きな欠損・損傷はあるが種判別可能)D(大きな損傷・欠損があり種半別不可能)の 4 段階に区分した。また、収集状況は、収集物の詳細な漂着状況(釣り糸が絡まっている、砂の中に埋まっていた等)を記録した。

## 結果と考察

本調査で集めた収集物は 2011 年に 73 羽、2012 年に 49 羽、2013 年に 42 羽の計 163 羽の海鳥を収集した(表 1)。

### 1) ハシボソミズナギドリ(*Puffinus tenuirostris*)

本調査では、計 55 羽のミズナギドリを収集した(表 1)。  
月平均収集数は、7 月で 8.6 羽、8 月で 6.3 羽、9 月で 3.3 羽と月を経るごとに収集数が減少する傾向が見られた(図 1)。

ハシボソミズナギドリの繁殖地は、オーストラリアのタスマニア島周辺にあり、繁殖期後の春から夏にかけて日本周辺に来遊する。太平洋沿岸では、6 月中旬に出現のピークがあり、9 月下旬までに繁殖地へ戻ると報告

されている(河井ら、2013)。そのため、ハシボソミズナギドリの月平均収集数が減少傾向にあったと考えられた。

収集状態は、A が 33 羽、B が 14 羽、C が 8 羽であった(表 2)。また、A 状態の月平均収集数は 7 月で 2.3 羽、8 月で 5.3 羽、3.3 羽と 8 月が最も高い値を示した(表 3)。また、前述のあるように、収集数は、7 月に最も多い傾向にあるが、太平洋側沿岸に來遊するハシボソミズナギドリの発見数は、6 月がピークである。そのため、漂着数も 6 月にピークがあると考えられる。しかし、本調査は 7 月から行なっており、7 月の収集物は多少欠損した B 状態での収集数が多いことから、漂着数のピークをカバーできていない可能性が示唆された。

### 2) コアホウドリ(*Diomedea immutabilis*)

本調査では、計 25 羽のコアホウドリを収集した(表 1)。

月平均収集数は、7 月で 5.0 羽、8 月で 2.3 羽、9 月で 1.0 羽とハシボソミズナギドリと同様に、月を経るごとに収集数が減少する傾向が見られた(図 1)。

コアホウドリの日本への來遊は、初夏から秋にかけて多く、また、日本海側には少なく、太平洋上での発見が主だと報告されている(河井ら、2013)。そのため、9 月の漂着数が減少したと考えられた。

また、収集状態は、A が 16 羽、B が 7 羽、C が 2 羽であった(表 2)。また、A 状態の月平均収集数は 7 月で 2.0 羽、8 月で 2.3 羽、1.0 羽と 8 月が最も高い値を示し、8 月及び 9 月は収集状態の悪い個体は収集されなかった(表 3)。

さらに、7 月の漂着状態 B 及び C の個体は、脚もしくは羽に漁具(釣り針、網)が羅網していた。また、簡易的に食道及び胃内容物を観察したところ、全個体で小型端足類が発見され、偶発的な漁具による混獲が漂着原因だと考えられた。または、投棄漁具によるゴーストフィッシングの影響が強いと考えられた。

### 3) ウミネコ (*Larus crassirostris*)

本調査では、計 23 羽のウミネコを収集した(表 1)。月平均収集数は、7月で 4.3 羽、8月で 2.0 羽、9月で 1.3 羽と月を経るごとに収集数が減少する傾向が見られた(図 1)。

収集状態は、A が 19 羽、B が 3 羽、C が 1 羽であった(表 2)。また、渡りを行うハシボソミズナギドリやコアホウドリに比べて欠損が少なく、波打ち際で収集する事が多かった。

ウミネコは、えりも岬周辺に周年多数生息している。また、収集したウミネコは、5月から6月頃に生まれ、7月に巣立った幼鳥個体もしくは当歳鳥であった。さらに、収集状態が良い個体が多い傾向にあったことも併せて、悪天候などで衰弱死した個体が漂着したものだと考えられた。

### 4) オオセグロカモメ (*Larus schistisagus*)

本調査では、計 31 羽のオオセグロカモメを収集した(表 1)。月平均収集数は、7月で 5.6 羽、8月で 2.6 羽、9月で 2.0 羽と月を経るごとに収集数が減少する傾向が見られた(図 1)。

収集状態は、A が 24 羽、B が 5 羽、C が 2 羽であった(表 2)。

ウミネコと同様にオオセグロカモメは、えりも岬周辺に周年多数生息している。そのため、ウミネコの結果と同様に、漂着個体は悪天候などで衰弱死した幼鳥もしくは当歳鳥であったと考えられた。

### 5) フルマカモメ (*Fulmarus glacialis*)

本調査では、計 14 羽のフルマカモメを収集した(表 1)。月平均収集数は、7月で 0 羽、8月で 2.0 羽、9月で 2.6 羽と月を経るごとに収集数が増加する傾向が見られた(図 1)。

フルマカモメは、北太平洋の亜寒帯域で繁殖し、北海道では、5月から11月に多く発見されている(河井ら、2013)。また、えりも岬地域は、8月末から秋サケ定置網が沖合 2km 以内の沿岸で行われており、えりも岬では、秋サケ定置網に羅網され、溺死する個体が多く発見されている。

そのため、8月から9月に羅網・溺死した個体が多く漂着したと考えられた。

### 総括

本調査における多くの収集物は、7月に収集された。また、渡り等の長距離移動する個体の漂着は、7月から9月にかけて減少傾向にあった。静岡県及び茨城県では、5目5科7種14個体の鳥類が、テグス等によって死亡したと報告されている(佐藤・勝田、2011)。そのため、主な漂着理由として、沖合の漁業や投棄漁具による混獲が原因だと考えられた。また、ハシボソミズナギドリでは、繁殖地での餌不足によって、渡りの初期に栄養失調になったため(中西、1999)や悪天候などによる飛行・移動の妨害による衰弱が漂着死亡している報告がされている(久保田、2006)。そのため、本研究でも収集状態の良い個体については、悪天候による衰弱死も主な漂着原因のひとつだと考えられた。

### 謝辞

本研究において漂着物の収集に協力していただいた石川慎也様、荻原涼介様に深謝致します。また、報告の機会を与えて頂いたえりも郷土資料館ほろいずみ館長の中岡利泰様にこの場をお借りしてお礼を申し上げます

### 引用文献

河井 大輔、川崎 康弘、島田 明英、諸橋 淳。  
2013. pp 1-400. 井上 哲編, 新訂北海道野鳥図鑑. 亜璃西社出版.

久保田 信. 2006 和歌山県田辺湾とその周辺海域  
へのハシボソミズナギドリ(ミズナギドリ科)の  
漂着. 漂着物学会誌. 4:43-44

佐藤 顕義、勝田 節子. 2011. 静岡県御前崎海岸  
と茨城県大洗海岸における海岸斃死鳥類  
1.斃死鳥類の状況とテグス等による被害. 東  
海自然誌(静岡県自然史研究報告).  
4:25-33

表 1 年別収集数と合計

年	月	ハシボソ ミズナギドリ	コアホウドリ	ウミネコ	オオセグロ カモメ	フルマカモメ	種不明	計
2011	7	7	7	3	9	0	2	73
	8	12	3	3	2	3	4	
	9	7	1	1	3	4	2	
2012	7	10	5	2	7	0	2	49
	8	3	1	2	5	1	1	
	9	1	1	2	3	2	1	
2013	7	9	3	8	1	0	1	42
	8	4	3	1	1	2	0	
	9	2	1	1	0	2	3	
計		55	25	23	31	14	16	164

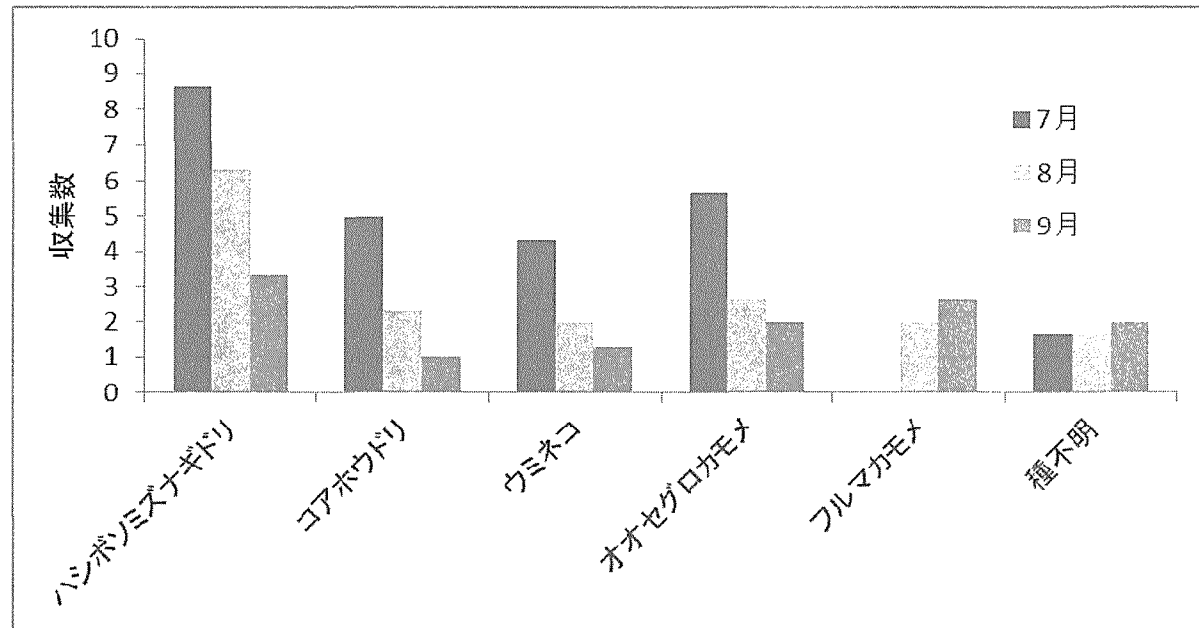


図 1 種別・月別平均収集数

表 2 種別・年別収集状態

状態	2011年			2012年			2013年			計	
	7月	8月	9月	7月	8月	9月	7月	8月	9月		
ハシボソ ミズナギドリ	A	2	10	7	5	2	1	0	4	2	33
	B	1	1	0	2	1	0	9	0	0	14
	C	4	1	0	3	0	0	0	0	0	8
コアホウドリ	A	0	3	1	4	1	1	2	3	1	16
	B	5	0	0	1	0	0	1	0	0	7
	C	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
ウミネコ	A	3	3	1	2	1	1	7	1	0	19
	B	0	0	0	0	1	1	1	0	0	3
	C	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
オオセグロ カモメ	A	8	1	3	7	4	1	0	0	0	24
	B	1	1	0	0	1	1	1	0	0	5
	C	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2
フルマカモメ	A	0	3	2	0	1	0	0	0	0	6
	B	0	0	2	0	0	1	0	2	2	7
	C	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
種不明	D	2	4	2	2	1	1	1	0	3	16

表 3 種別・月別平均収集数

種名	収集状態	7月	8月	9月
ハシボソ ミズナギドリ	A	2.3	5.3	3.3
	B	4.0	0.7	0
	C	2.3	0.3	0
コアホウドリ	A	2.0	2.3	1.0
	B	2.3	0	0
	C	0.7	0	0
ウミネコ	A	4.0	1.7	0.7
	B	0.3	0.3	0.3
	C	0	0	0.3
オオセグロ カモメ	A	5.0	1.7	1.3
	B	0.7	0.7	0.3
	C	0	0.3	0.3
フルマカモメ	A	0.0	1.3	0.7
	B	0.0	0.7	1.7
	C	0.0	0	0.3
種不明	D	1.7	1.7	2.0

